新型コロナウィルス感染における学校対策レポート from アメリカ（第 2 回）
―3 密を避け、4 密を創る教育関係者たち：教育長、管理職、教員、専門職―

こくご学園　学園長
学校心理士　木原美妃

息子のクラスの Web 会議サービスを使ったオンライン授業（毎週金曜日 12:00-12:45)では、担任が必ず「今週のいいニュースは？」と尋ねてくれる。子どもたちは自宅退避の中でもそれぞれ「歯が 2 本も抜けました！」、「ベランダに鳥が来たので餌をあげました。」、「チョコレートマフィンを作ったので、先生にも作ってあげたいです。」などと笑顔で話していた。週はじめには 1 週間の細かい学習計画をメール添付で送ってくれるので、家庭での学習が習慣化してきた。徐々にそして確実に、この環境に適応してきたように思う。

さて、前回のレポート[1]での報告の通り、サンディエゴ学校区では成績に反映される正式な Distance Learning (遠隔教育）[2]開始までの 3 週間を、全教員の研修および準備期間 Soft launched period (試験的期間）と位置づけている。この間に、保護者・児童・生徒もオンライン授業へ対応できるよう準備してきた。4 月 27 日から本格的に Distance Learning が始まるが、息子のクラスに関しては、オンライン授業が週 2 回に増える程度で、劇的な変化があるわけではなさそうだ。未曾有の状況の中、すべての学校関係者がそれぞれの役割はあるが、子どもたちの大切な命を守り、学習支援を継続させていく方法を模索し、協働している。学校、家庭の間では、普段から構築されている**親密**で**濃密**な人間関係に基づいた**密接**な連携が、Distance Learning の**周密**な準備と配慮を可能にしており、今、日本で話題の 3 密[3]ならぬ 4 密（4 番目の密）を創り上げて実践しているといえる。

１．普段から築かれていた、**親密**で**濃密**な人間関係

---

[1] 新型コロナウイルス感染における学校対策レポート from アメリカ　ーソーシャルディスタンスの中につながりを作るサンディエゴ学校区の対応ー　http://schoolpsychology.jp/info/info-covid/2020/200422-fromAmerica.pdf

[2] Distance Learning （遠隔教育）とは教員が児童・生徒と物理的に直接対面して教育を提供するのではなく、離れた場所から授業を教えたり、課題を出したりする教育をいう。

[3] "新型コロナウイルス感染症への対応について（高齢者の皆さまへ ...." 17 Apr. 2020, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/yobou/index_00013.html. Accessed 26 Apr. 2020.

新型コロナウイルス感染症が疑われる者と長時間の接触があった者は「濃厚接触者」と定義されているが、アメリカの学校スタッフ間の関係や学校と家庭との関係は、「濃密接触」と定義してもいいかもしれない。幸いなことに、新年度が 9 月スタートのアメリカでは、担任と子どもたちが「濃密接触」する関係を構築するのに十分な時間があった。担任は最低でも週に一回、メールで授業・課題・その他の重要事項について連絡を行う。メールの最後の文面には、必ず子どもたちや保護者への感謝が示されている。保護者は、学校行事やボランティアなどを通して、担任の人柄を把握している。現在は、各家庭が失業（の危機）、在宅勤務、子育て、家庭学習と色々な課題を抱えながら生活を送っている。教員も色々な事情を抱えながらの在宅勤務となるため、1 日あたりの実働時間を 4 時間勤務（児童、生徒対応に 2 時間、授業の準備に 2 時間）を超えないようにと指導されている。しかし、通常業務に加えて、保護者からの様々な相談やリクエストへの対応などを考えると、相当な労力がかかっているのは明らかである。そのような担任を労うように、クラスのメールでは、児童、生徒、保護者から担任へむけた感謝の言葉で溢れている。

保護者や子どもたちが「濃密接触」する学校スタッフは、担任だけにとどまらない。教育長からは毎週 1 回必ず学校区の教育活動についての最新情報がメールで届く。校長からは毎週日曜日の夜 7 時にメールおよび音声電話でお知らせが届き、カンファレンスや行事のお知らせのほか、授業への取り組みについてなど、多くの情報が提供される。スクールサイコロジストなどの専門職からは、特別な支援を必要とする家庭に毎週お便りが寄稿される。もちろん、この関係は一方向にとどまらず、保護者や子どもたちは、専門職と直接面談する機会が与えられる他、校長に直接メールで質問したり、意見を申し立てたりもできる。

Distance Learning の準備期間中、保護者の間で「あのクラスでは宿題課題を印刷せずにプラットフォーム内で宿題提出ができる」や「こちらの先生は毎日オンライン授業をしてくれる」などの噂が飛び交った。これらをいち早く察した校長が、「教員やスタッフも様々な事情（IT 環境、子育て、介護など）の中で Distance Learning の準備を進めているので、やみくもに比較するようなことは避けてほしい」とメールで呼びかけた。このような校長のタイムリーで誠意ある対応が、校長と教員間の親密な人間関係の構築に役立っているのだろう。このように普段から構築されている教育現場の「濃密接触」によって、コロナ禍においても次に紹介するような「密接な連携」を可能にしている。

２．教育現場の**密接**な連携

息子のクラスメイトの親が、オンラインクラスを毎日開催してほしいと強く要望するメールをクラス全体に向けて発信した。しかし、担任は毅然とした態度で、「授業スタイルの質問や要望などがあれば校長に直接連絡してください」と連絡した。校長と教員との間に築かれた親密な関係と、密接な連携が、このような対応を可能にしているのだろう。管理職が学校スタッフと密な連携をとるために、コロナ禍で校長やスクールサイコロジストがどのような役割を果たしているか、メールでインタビューを行った。

校長は「Distance Learning によってできうる障壁を予測し、それを取り除くことを第一に考え、学校区や学校で今なにが起きているのかに気づき、状況を把握するように努めている。教員がテクノロジーを不自由なく使えているか、十分な研修を受けられているか、子どもたちが Distance Learning の環境を整えているかなどについて確認している。家庭の社会的・心理的なサポートに努めている。」と回答した。学校スタッフのみならず家庭からの情報収集にも努めており、各方面との連携の充実を図っている姿が見て取れる。

サンディエゴ在住のスクールサイコロジストである池田真依子さんの話では、スクールサイコロジストもまた、電話やオンライン会議（週 1－2 回）を利用して、校長・専門職・ケースマネージャー・教員と密接に連携をとっているとのことだ。通常時と同様に、子どもたちのサポートを維持できるように尽力しており、保護者や教員に直接連絡した場合は、全て記録に残しておくことが義務付けられているとのことだ。

このような密接な連携は、情報や問題の共有を可能にし、学校スタッフのストレスの軽減にもつながっているかもしれない。

３．Distance Learning へ向けて、**周密**な準備と配慮

学校区から教員へ：コロナ禍に対応して、学校区では迅速に Instructional Technology Team（教育工学支援チーム）が立ち上がり、校長と教員を対象とした Distance Learning の研修プログラムが組まれた。研修プログラムは月曜日から金曜日の 9 時から 3 時までのセルフラーニングセッションが主体となっており、各教員の都合やレベルにあわせて研修を受けられるように配慮されている。研修内容には、オンラインプラ

ットフォーム[4]（Google Class Room[5]、Seesaw[6]や Canvas[7]など）の選択や Web 会議サービス（ZOOM[8]や Google Meet[9]など）の準備などが含まれる。急ごしらえのプログラムとは思えないほど周密に練られた研修が提供されている。

学校区から家庭へ：学校区はいち早く Distance Learning を受けられる環境になっているかを問うアンケートを実施した。各家庭におけるパソコン等の保有状況とインターネットへの接続状況について掌握し、必要な家庭に対してパソコンを配布した。日本で言うところの三密（密集、密室、密接）を避けるため、ドライブスルー方式（車で学校を訪れて、職員がトランクにパソコン等を入れてくれる）で配布するところがアメリカらしい。サンディエゴの学校区では約 100,000 人の児童・生徒に対しておおよそ

図　ランチと保存食等の配給

[4] オンラインプラットフォームとは、教員と児童・生徒（保護者も含む）が双方向性のオンデマンド型のコミュニケーションを行うもので、宿題の通知、議論、提出のみならず、録音や記述・記録することができ、成績の管理も可能なシステムをいう。
[5] "Google Classroom." https://classroom.google.com/. Accessed 26 Apr. 2020.
[6] "Seesaw." https://web.seesaw.me/. Accessed 26 Apr. 2020.
[7] "Canvas - Instructure." https://www.instructure.com/canvas/. Accessed 26 Apr. 2020.
[8] "Zoom: Video Conferencing, Web ...." https://zoom.us/. Accessed 26 Apr. 2020.
[9] "Meet - Google." https://meet.google.com/. Accessed 26 Apr. 2020.

47,000 台のパソコンが配布された。学校区では 90%の子どもたちが Distance Leaning を開始できていると確認した。また、学校閉鎖後すぐに、子どもたちの食事サポートも開始された。学校区内で指定された 19 校(全 239 校中）にて、毎週月曜日－金曜日 11:00-13:00 にドライブスルー方式で、全家庭にランチを配給している。4 月 20 日からは週 5 日 7 食提供（ランチ 5 回のランチ、木・金は翌日の朝食も）が開始され、今後は週末の食事についても検討される模様である。

以上のように、サンディエゴ学校区では、教育に関わる全ての人が、立場は異なれど重なり合う思いを感じ、タイムリーにみんなが同じ方向を向いて頑張ろうとしている。濃密で周密な、そして親密かつ密接な連携が、「子どもたちの学習を継続しよう」、「この状況から学ぶことが必ずある」、「コミュニティや学校はいつも家庭とつながっている」という共通認識を創りあげているのだろう。

自宅退避命令が発令されてから 4 週間が経ち、学校区から学校再開を判断する様々な条件についてのお知らせが届いた。学校再開まではまだまだ時間を有することがわかっている。

※本レポートは著者が在住するサンディエゴ地区での対応についてのレポートであり、他の学校区および学校で同じ取り組みがあるとは限らない。

著者の紹介：木原美妃　サンディエゴ在住の学校心理士。こくご学園学園長。津田塾大学卒業。ミシガン州立大学大学院教育学研究科でスクールカウンセリングを学ぶ。M.A. in Counseling。 日本学校心理士会・日本学校心理学会会員。

学校心理学からのコメント：サンディエゴの学校区の報告から、子どもや保護者・教師等の安全を守るために 3 密をさけながら、親密で密接な人間関係に基づく教育の様子がよく分かります。そして家庭・学校・地域（学校区）の連携、保護者・校長・教師・スクールカウンセラーらの連携で、子どもの学習を保障し、心理社会的な安定的な発達を支える具体的な教育実践が、日本の現場でもヒントになります。まさに「物理的には距離を取るが、社会的にはつながる」ですね。ドライブスルー方式でパソコンを渡したり、ランチを提供したりするのは、家庭学習・家庭生活の支援ですね。私が関係する茨城県の市でも、3 月の学校の休業中に、ＰＴＡの有志が子どもに昼食を提供していました。（石隈利紀）